

海面を滑走する淡水性アメンボ(半翅目, アメンボ科)

久保田 信

アメンボ類は昆虫類の中では、一生の大半を水面上で過ごすことでユニークな分類群として知られる。日本には6属22種が分布し、それらの多くは淡水性であるが、海洋上で生活する小形のウミアメンボ類も6種知られている(日高, 1993; 立川, 1996)。和歌山県白浜町沿岸にもウミアメンボ類が吹きよせられてくることがあるが、今回、淡水性アメンボ類の一種 *Aquarius* sp. (おそらくアメンボ *Aquarius paludum*) が漁港の海面を滑走しているところに遭遇した。これは同地点で1999年に初めて遭遇して以来のことで、稀ではあるが淡水を生活場所とするアメンボが海面にも出現する場合があることを示している。今回の遭遇では2個体が一緒に滑走していたことで、昨年の単独個体の滑走とは異なっている。今後の継続観察を要する発見であるが、今回の一例を記録しておく。

海面を滑走するアメンボ

発見場所

和歌山県白浜町瀬戸漁港

発見日時

2000年4月10日午前8時30分

発見状況

2個体が並んで漁港の岸壁(干潮時であり、水深2m)に沿って滑走。少なくとも5分間、数十mの距離を移動。スピードも早く、淡水面での滑走と大差なかった。摂餌および2個体間の何らかの干渉も見られなかった。当時は曇量10、観察中に雨が降りだしたので観察を中止した。

考 察

上記2個体および昨年の1個体のアメンボが、海面を滑走した経緯について、以下のような推

論をたて、その可能性について考察した。

1. 淡水と間違えて着水

アメンボがどれほどの距離を、どのような高度で、どれくらいの時間飛行し続けるのか未知であるが、着水に際し淡水と海水を区別してから実施するのではあるまいか。潮の香りなどを感知する化学受容器が備えているかもしれない。従って、これまで海面をアメンボが滑走することを聞いたことがない。

2. 飛行に疲れ落下した所がたまたま海面上

2個体の滑走のスピードからみて、発見時に疲れから既に回復していなければ、この可能性はない。発見日には強風が吹いていなかったのて吹き飛ばされた可能性はないだろう。ただし、普段より海岸まで飛行を続けてきたのかもしれない。

3. 降雨を避けて一時的に着水

海面上ではあったが、不利と思える降雨中飛行を避けてやむなく着水したのかもしれない。これはただ一度の著者自身の以下の経験からの類推である。1999年7月30日の早朝に、上富田町南紀の台のもっとも高度の高い地点の道路上を1個体のアメンボが、おりからのシャワーで落下し、しばらく道路上を歩いていたが、その後すぐ雨が止むと飛翔したのを目撃した。この発見地点のすぐ近くの田辺市新庄公園内の淡水のため池に多数のアメンボが滑走している。この個体は、そこに生息する集団の一員ではあるまいか。

引用文献

- 日高敏隆. 1993: 海に生きるアメンボ. in 動物たちの地球 116 外洋. pp. 232-233, 朝日新聞社.
立川周二. 1996: アメンボ類. in 石井実・大

谷剛・常喜豊 編集，日本動物大百科 8 昆虫 1，初版第 1 刷．pp. 170－171，平凡社，東京．

京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所
(〒 649－2211 西牟婁郡白浜町)